

中神琴溪 医案②

京師竹屋町衣棚東角下駄屋 与兵衛が妻、初め吐瀉 盆を傾くるが如く、状 霍乱に似て全身氷の如く厥冷し、脉絶せんとする事半日、煩躁して衣を着すれば投じ去る。不食、大いに渴き、水を欲すれども与うれば必ず吐す。此の如き事四五日、尚お死せずして依然たり。予を請う。予詣りて見れば、前医の与うる所の附子理中湯 尚お一二貼 爐辺に剩せり。其の腹を診するに臍下石の如く鞭し。予曰く、是れ血症なり、理中湯は与うべからずとて、既に煎じたる理中湯の薬汁を流し捨て、別に桃人承気湯を作りて服せしめしに、臭穢の物を多く下して、三日の内に厥回り諸症退きて全愈す。其の後二年を経て又発する事前の如く、予又桃人承気湯を与えて愈えたり。若し此の如きの時に当りて思慮精しからざれば必ず人を殺すなり。大抵今時の医家、四肢厥逆すれば四逆湯。身大寒、反て衣に近づくことを欲せざる者は白虎湯、又其の次は附子理中湯、或いは真武湯・当帰四逆、或いは水逆あるを見れば五苓散の類に出でず。さても治せざれば参附独参の類にてとどめをさす。是れ今時医家の通弊なり。